

Title	厳密な読解をもとめる詩 : パウル・ツェランと金時鐘をめぐって
Author(s)	細見, 和之
Citation	越境文化研究イニシアティヴ論集. 2020, 3, p. 37-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75559
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

厳密な読解をもとめる詩

—パウル・ツェランと金時鐘をめぐって—

細見 和之

私はこれまで、金時鐘の詩と生涯を、戦後パリで暮らしながらドイツ語で詩を書き続けたパウル・ツェラン（1920—1970）の詩と生涯と重ねて理解することを試みてきた。二人が両親の死に対してトラウマに近い深い罪悪感を背負ったひとり息子であること、故郷（金時鐘にとっての済州島、ツェランにとってのチェルノヴィッツ）を離れて異郷で暮らしたこと、言語（金時鐘では朝鮮語、ツェランではドイツ語）を教えることを生活の糧としていた時期を持つこと、なによりも両者がともに恨み多い言語（金時鐘にとっての日本語、ツェランにとってのドイツ語）で詩を書き続けたこと、しかもその作品の根底に 20 世紀を象徴する暴力の記憶（金時鐘においては植民地体験と四・三事件、ツェランにおいてはホロコーストと戦後も続く反ユダヤ主義）が横たわっていること、これらの点で、金時鐘とツェランはユーラシア大陸の東と西を代表する詩人と私には思われるのだ。

しかし、上記の点にくわえて、その作品が厳密な読解をもとめるものである、という点においても、両者は共通していることに、この間、私はあらためて目を留めざるをえなかった。通常私たちは、作品の解釈は読み手の自由に委ねられている、と考えているだろう。極端な話、作者が喜びを込めた作品が悲しみに満ちた詩として読まれ、悲しみを込めた作品が喜びに満ちた詩として読み解かれるとしても、それはむしろ作品の内蔵しているゆたかさを見出すのが一般的ではないかと思われる。さらに、その作品が作品外の「知識」を必要とするならば、そのことが明確に注記されていなければならない。そういう了解が私たちのあいだでは前提になっているだろう。ところが、金時鐘とツェランの場合、そういう約束にはどうやら収まらないところがあるのだ。

たとえば、関口裕昭『パウル・ツェランとユダヤの傷』（慶應義塾大学出版会、2011年）を読めば、作者が作品を実際に書いた場所、あるいは下敷きにしたテキストといったものをいったんはきちんと理解しないかぎり、およそ読めない作品がツェランには膨大に存在していることが分かる。ほとんどそれは愕然とするほどだ。しかも、そのことを踏まえて理解してほしいとツェラン自身が願っていたことも確かなようなのだ。私自身、わずか 2 篇だが、ツェランの作品の厳密な読解を試みたことがあるが、そういう試みをする以前と以

降では、作品の相貌がまったく異なって立ち現われてきたのだった（これについては拙著『投壘通信』の詩人たち』岩波書店，2018年を参照いただきたい）。

同様のことは、まさしく金時鐘の作品にもあてはまるように思われるのだ。金時鐘の場合には、四・三事件にしろ、吹田事件にしろ、明示的に書くことが困難な事柄を対象としつつ、同時に、その一行一行、一語一語に明確な意図が込められている。なんとなく書かれた言葉はただの一語も存在していないのだ。私たちが金時鐘の作品から作者の意図を超えたイメージを描き出すことも不可能ではないだろうし、また、それがなければ、そもそも読者の解釈にはなんの役割もあたえられないことになりかねない。しかし、そういう解釈もまた、あくまで作者の意図を踏まえたものでなければならないのだ。

なぜ二人の作品はそうなのか。それは詩を超えて、表現論ないし芸術論一般にどういう問いかけを発しているのか。そういった問題を私たちは今後、さらに追求する必要があるだろう。

金時鐘が組織批判に晒されていちばん苦しい状態に陥っているとき、その様子をつぶさに見ていた梁石日は、金時鐘は自殺してしまうのではないか、気が狂ってしまうのではないかと繰り返し自問せざるをえなかったという。実際、ツェランも、また、アウシュヴィッツ体験を潜り抜けて優れた小説とエッセイを書き続けていたプリモ・レーヴィ（1919-1987）も、最後は自死という結末を迎えてしまった。金時鐘が90歳＝渡日70年を迎え、いまなお新たな作品を書き続けていること、そしてそのことを身近で感じながら私自身が同時代人として生きていることができることに、私は畏怖に近い感情をおぼえずにられない。